

キャラクター名
利重 郁人 (とししげ いくと)

プレイヤー名

シンドローム	バロール		ワークス	FHセルリーダーA	カヴァー	FHセルリーダー
	バロール					
オプション			年齢	性別		男
覚醒	死	衝動	憎悪		初期侵食率	36 %
出自	安定した家庭	経験	FHへの忠誠		邂逅	欲望：平穩

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	26
肉体	0	1	0			1	行動値	8
感覚	2		0			2	(非装備時)	8
精神	4		0			4	戦闘移動	13
社会	2		0			2	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC	6		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転	2		芸術			知識			情報	FH	1
運転			芸術			知識:レネゲイド	1		情報		
運転			芸術			知識			情報		
運転			芸術			知識			情報		
運転			芸術			知識			情報		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
①②③	RC	10r+6	-	14		C値：8、同エンゲージ可、浸食率：5
①②③ (100%↑)	RC	11r+6	-	16		C値：7、同エンゲージ可、浸食率：5
①②③☆	RC	10r+6	-	29		C値：8、同エンゲージ可、浸食率：10
①②③☆ (100%↑)	RC	11r+6	-	36		C値：7、同エンゲージ可、浸食率：10

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
コネ：噂好きの友人	
コネ：要人への貸し	

合計装甲： 0 合計回避： 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
申し子	P	N		
坂上星也	P 連帯感	N 悔悟		
一鳴真響	P 友情	N 敵愾心		
坂上愛花	P 庇護	N 偏愛		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセ：バロール	2	2	MJ	-	-	-	-	
効果： C値-Lv(下限7)								
黒の鉄槌	6	1	MJ	視界	単体	対決	-	
効果： 攻：[Lv*2+2] /同エンゲージ不可								
黒星の門	5	2	MJ	-	-	-	ピュア	
効果： 攻判定：+ [Lv+1] D/同エンゲージ可								
因果歪曲	2	3	MJ	-	範(選)	対決	-	
効果： 範囲(選択)に変更/シナリオLv回								
暗黒の槍	1	3	MJ	-	-	対決	-	
効果： 装甲値無視、HP-5、シナリオLv回								
黒星粉碎	1	4D10	MJ	視界	範(選)	自動	120%	
効果： [Lv+5]DのHPダメ、シナリオ1回								
アンプリフィケーション	3	5	MJ	-	-	-	Dロイス	
効果： 攻撃力+[Lv*5]、シナリオ3回								
ディメンジョンゲート	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

生と死の輪舞曲 元PC① 復讐される側

《生と死の輪舞曲》
幼馴染である坂上愛花と共にバス事故に巻き込まれた際に覚醒。自分でも気づかぬうちに化け物じみた力を得てしまう。レネゲイドやUGN等非日常を受け入れられないまま、愛花の入院する病院についての調査を手伝うことに。調査を進めていく内に、愛花はバス事故に巻き込まれた際、既に死亡していたことが判明。愛花の兄である坂上星也がEMレネゲイド『生と死の輪舞曲』を奏することで愛花を含め病院内の死亡した患者の延命を行っていた。会話も行動もいつもと変わらぬ愛花の死を認めることが出来ずUGN側と対立。結果、PC②、PC④の犠牲と引き換えに愛花と星也を連れて逃亡に成功する。

約束していた花火を三人でみた。

《FH》
上記シナリオ後、FHに拾われる。『生と死の輪舞曲』を演奏する度に浸食率が上昇することから郁人、星也の二人では限界。そのため、FHの研究機関と協力関係を結び、チルドレンを斡旋してもらった代わりに実験に手を貸している。また、星也は音楽教室を開いており、生徒の中からオーヴァードの素質があるものを選別している。

誰かを犠牲にして『日常』を送っている自覚はある。